

未知の海で宝探しを

この本は「読書はしないといけないものなのか」という新聞の投書をきっかけに書かれた。私がこの問いを受けたなら、読む読まないは自由だけど、読書をけなすのはやめてほしいと答えたい。著者、丹羽宇一郎氏は元ビジネスマンの視点で、本は沢山の情報を持つものであり、読むのが当然のものだと言わんばかりの口調で語る。私はそうは思わない。好きだから読むもの、趣味だ。

本書が強調するのは「考えながら読む」と。自分で考えてはじめて、本から得た情報が知識になるという。本は沢山のことを自動的に与えてくれる。受け身の読書をしていても得られるものは多い。しかし著者はそれだけでは許してくれないみたいだ。考えなければ身につかない、と知識を得ることに重きを置いている。読書をただ楽しむということ

許してくれない考え方に少しの反発をしたくなるけれど、確かに大切なのは本に詰まっている情報の中に手を突っ込んで、必要なものを貪欲に掴むこと。与えられるものをただ受け取るより自分から探しに行けばもっと沢山のものが隠れている。楽しい。宝探しっぽい。

そしてもうひとつ。「傲慢になるな」丹羽氏は何度も繰り返す。自分は無知だと自覚すること。それには本が最適だと。著者が言うように、新しい知を得ることも大切だ。さらに私は、本は日々自分が見過ごしているものに意味をくれるものだと思っている。そのためには今自分は何も知らないという気持ちでいなければならぬ。無知の知を知らせてくれる何かに触れることで、新たなことを知ることが出来る。この心構えを持てるなら本でなくとも私はいいと思う。謙虚になって知識を探しにいけるなら、映画でも歌でもいい。人によって様々だ。もし本が嫌い著者の感

覚に入れなかったとしても、そこで選択した
自分の信頼するものを本に置き換えてこの本
を読めば、傲慢にならないためのブレーキに
なってくれると思う。
ただ、私は仮定をせずとも本が好きだ。本
に頼っている。私の目では平凡にしか見られ
ない日々を気付きでいっぱいにしてくれるの
が本。著者、丹羽宇一郎氏の、他より本に信
頼を置く物言いに共感できた時、改めて私は
本が好きだと感じた。そして、謙虚という言葉
葉を頭に置いて振り返ると、過去に読んだ本
にも、膨大な量のまだ発見できていない知が
眠っていると思った。傲慢になんてなれっこ
ない。本は未知の海だと思う。